

## 促成イチゴ・ポット育苗技術確立に関する研究

## 第1報 鉢土について

齊藤久男・田中龍臣・脇部秀彦（佐賀県農業試験場）

SAITO, H., T. TANAKA and H. WAKIBE: Raising methods of pot seedling of Forcing strawberry. 1. Types of Pot Soil

花芽分化の促進と収穫前進化をねらったポット育苗の効果は高く、既に実用化している。標準培土として山砂を利用しているが、重粘質の埴土では鉢土と本圃土壌の物理特性の違いから植傷みの発現様相が違い、ポット育苗の効果が減殺されるだけでなく、本圃土壌への悪影響が大きいと考えられるので、その改善対策として1980年から鉢土について検討したのでその結果の概要を報告する。

## 1. 試験方法

品種は“はるのか”を用い、試験区は1) 山砂(7)+もみがらくん炭(3), 2) 埴土(7)+生もみがらくん炭(3), 3) 埴土(7)+生もみがら(3), 4) 埴土(10)+土壌改良剤(PX 粒剤(3g/株)の4区を設け、12cm径の黒ポリポットに鉢土600ccを詰め、葉数3~4葉展開し発根した苗を6月12日に鉢上げした。施肥は複合液体肥料(5:6:4)400倍液を100ml/株、7日毎に6回施用した。定植は9月19日にうね巾120cm、株間20cmの2条植とした。施肥量はa当たり三要素成分量1.8kgあて施用した。保温開始とマルチは10月18日に、多層カーテンは12月10日に行った。定植後の一般管理は促成栽培における慣行法に準じた。

## 2. 試験結果及び考察

1) 苗の発育: 各区の鉢土は団粒化し透水性はよかった。各部位の発育量は山砂区が勝ったが、埴土+生もみがら区は発育が劣った。これは施肥した窒素分が生もみがらに吸収されたため植物体への吸肥量が減少し、初~中期の生育に影響したためである。頂果房の花芽分化は各区9月5日から始まり、定植時は花弁形成期に入ったが区間差は少なかった。

2) 開花・収穫始: 頂果房の開花は各区間の差は全くなく10月20日ごろに、第2果房は12月上旬に始まったが、山砂区がやや遅れた。収穫は11月20日ごろより始まり埴土+PX 剤区が早く、他の区は2~3日遅れた。

3) 株当たり収量: 頂果房の着花数は埴土+PX 剤区の15花で多く、埴土+生もみがら区が12花で少なく、他の区は13花前後の着花を示した。時期別の収量は、埴土+もみがらくん炭区とPX 剤区の両区が最も多く、年内収量は130g前後に対して、山砂区と埴土+生もみがら区はともに100g程度で少なかった。2月までの前期収量でも年内と同様の傾向を示し、埴土+もみがらくん炭区の276g、PX 剤が264gで勝り、次に生もみがら区の234g、山砂区は220gで最も劣った。全期間の収量での各区間差は年内から前期までと全く同一傾向を示し、埴土+生もみがら区の461gと山砂区は456gの収量に対し、埴土+もみがらくん炭区及びPX 剤区がともに505gで、標準培地の山砂区より11%程度増収した。

## 3. 総括

以上の結果から本県のイチゴ栽培地帯に分布する海成沖積埴土を鉢土として検討したが、配合素材としての生もみがら区は育苗中施肥した窒素分が吸収されたため、初~中期の発育が遅れ本圃の生育収量に影響したため、使用前2ヵ月間窒素分を補給し熟成化が必要である。特に利用効果の高かったのは、もみがらくん炭や土壌改良剤(PX 粒剤)を配合した鉢土で、透水や通気性がよく、団粒化し、苗の生長や花芽分化形成及び本圃の生育等順調であった。したがって、標準培地である山砂以上の増収効果があり適用できる。

第1表 定植苗と本圃の生育及び収穫調査(総括)

試験区	苗の発育				本圃の生育				株当たり収量							
	総重	ク ラ 径 ウ	葉柄NO <sub>3</sub> -N		花芽ステージ		頂果房		年内(11~12月)		初期(11~2月)		全期(11~4月)		左果重 区対比 %	
			g	mm	ppm	ppm	1.5 △ 2.0	月日	月日	花	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ		ヶ
山砂+もみがらくん炭 (7) (3)	21.1	10.7	0	0	1.5 △ 2.0	4.3	10.22	11.22	13.1	8.9	100.4	19.1	219.6	44.8	455.9	100.0
埴土+もみがらくん炭 (7) (3)	16.8	10.3	30	0	1.5 △ 2.0	4.0	10.22	10.23	13.8	11.0	130.1	23.3	276.1	48.4	505.1	111.0
埴土+生もみがら (7) (3)	14.2	10.0	20	0	1.5 △ 2.0	4.2	10.23	11.23	12.3	8.6	103.4	19.8	234.0	44.0	460.8	101.0
埴土+PX 粒剤 (10) (3g/株)	16.4	10.3	10	0	1.5 △ 2.5	4.3	10.20	11.20	14.9	10.9	122.6	23.0	263.8	49.0	505.1	111.0

注) 苗の調査個体: 中庸5株平均値  
花芽分化ステージ: (1.5)生長点肥厚期, (2.0)花房分化期  
(2.5~3.0)花弁形成期, (3.5~3.5~4.0)花弁形成期  
本圃の調査個体: 1区10株4反復平均値